

所属	看護学研究科 看護学専攻 修士課程 ウィメンズヘルス看護学分野	修了年度	平成 29 年度
氏名	川下 貴士	指導教員 (主査)	及川 裕子

論文題目	児童思春期病棟に勤務する精神科看護師の子ども虐待の認識
------	-----------------------------

本文概要

【目的】

児童思春期病棟に勤務する精神科看護師の子ども虐待の認識を明らかにする。そのほか、児童思春期病棟に勤務する精神科看護師の子ども虐待への認識と愛着スタイルとの関連を明らかにする。

【方法】

児童思春期病棟に勤務する看護師 370 名を対象にした。質問票については、子ども虐待の認識を測る尺度として飯田ら（飯田，大平，鈴木他，2013）の質問票を使用し、個人の特性をみるものとして、加藤（1998）が作成した Bartholomew らの 4 分類愛着スタイル尺度（Relationship Questionnaire：以下 RQ と略す）の日本語版を使用した。分析は飯田らが行った先行研究と比較検討を行い、質問票は因子分析し因子構造を明らかにした。また、因子間の平均の差と RQ 日本語版との関連性をみた。なお、統計処理は SPSS（Ver.24）を使用した。因子間の得点は低いほど認識が高いとした。

【結果】

承諾を得た 17 施設の看護師 370 名に配布し 123 名から返信があった（回収率 33.2%）。そのうち有効回答者数は 118 名であった（有効回答率 95.9%）。精神科看護師の子ども虐待の認識は先行研究と比べて高かった。質問票については、最尤法・Promax 回転による因子分析を行い、2 つの因子を抽出した。第 1 因子は【愛着が形成されていない子ども】（ $\alpha=.771$ ）、第 2 因子は【愛着が安定している子ども】（ $\alpha=.710$ ）とした。第 1 因子、第 2 因子と RQ 日本語版による愛着スタイル別の相関関係をみるため、Spearman の順位相関を行った。その結果、第 2 因子と愛着スタイル（タイプ 4、恐れ型）の 2 変数間に有意な正の相関がみられた（ $r=.227$, $p<0.05$ ）。

【考察】

精神科看護師の子ども虐待の認識は高い傾向にあった要因として、日々の業務の中で被虐待児へのケア経験が多く、認識が高い結果になったと推測する。第 1 因子【愛着が形成されていない子ども】は、援助交際を繰り返すといった質問項目で構成されていた。看護師は家出や援助交際などの反社会的な行動を示す子どもに対して、虐待を受けているリスクが高いのではないかと認識していることが考えられる。第 2 因子【愛着が安定している子ども】は、自分自身の良いところを言えることといった質問項目で構成されていた。看護師は、健康的な愛着形成ができていない子ども本来の姿を認識していることが考えられる。また、第 2 因子と愛着スタイル（タイプ 4、恐れ型）の相関では、愛着スタイル（タイプ 4、恐れ型）にあてはまる人ほど【愛着が安定している子ども】の因子得点が高くなり、子ども虐待への認識が低くなる可能性があるということが考えられる。

【結論】

1. 児童思春期病棟に勤務する精神科看護師の子ども虐待の認識は先行研究と比べて高かった。
2. 因子分析を行った結果、第 1 因子【愛着が形成されていない子ども】、第 2 因子【愛着が安定している子ども】が抽出された。
3. 第 2 因子の因子得点と愛着スタイル（タイプ 4、恐れ型）の 2 変数間に有意な正の相関がみられた。

【キーワード】 児童思春期病棟・精神科・看護師・子ども虐待・認識